

教会短信

牧師 間瀬 善彦

聖書の創世記に、地上に人の悪が満ち溢れていたために、神が大洪水を起こし、人類を滅ぼされたことが記されています。ただ生き残ったのは、神の御言葉に素直に従ったノアの家族のみでした。この話を思い起こすと、今の世においても、いつ神が再び大洪水を起こしても不思議はないと思えてきます。

ノアの時の大洪水はどうして起こったのでしょうか。「洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった」(マタイ 24:38-39)。ノアの時代の人々は、「食い、飲み、めとり、とつぎなどして」この世の平和を謳歌していました。しかし、それは神の目から悪と映ったのです。自分たちのみの平和にしたっていることは、真の平和ではないからです。それは見せかけの平和、うわべだけの平和に過ぎないからです。そのような平和はすぐにメッキがはがれてしまいます。ノアの時代の人々は、自分の周りに苦しんでいる人、重荷を抱えている人がいることに気づいていたのでしょうか。自分が敵とする人たちのことはどのように考えていたのでしょうか。彼らは自分のみの、自分の家族のみの幸せしか考えていなかったのではないのでしょうか。そのことを聖書は、洪水が起こるまで「彼らは気がつかなかった」と言っているのです。

「キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、…十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである」(エペソ 2:14-16)。人間の心の中にある敵意、敵を愛せないということが、私たちが平和をこの地上に作り出していこうとするときに、最大に障害となるのです。敵というところまで行かなくても、気の合わない人、好きになれない人は、誰にでもいます。好ましくないという感情は、私たちがどんなに覆い隠しておこうとしても、相手に伝わるのです。相手はその感情を察知して、あなたに対して冷たくなるはずです。

私たちは、敵を愛せない心を当然のこととしないで、キリストと共に十字架にかけていただかなければなりません。敵を愛せない心の罪を、キリストが私たちの身代わりに十字架上で負ってくださいと信じることができれば、どんなに心が救われるでしょう。この世に平和を作り出すということは、まず私たちの心が神と和解して平和になることから始まるからです。

靖国神社を訪れて

東京をはじめとする関東のバプテスト教会の企画の一環として5月26日に靖国神社を訪れました。当日は、5月の終わりにしては暑い日でした。靖国神社の大鳥居前に集合しました。この日は、常盤台教会の方と恵泉教会の方が案内をされました。まず靖国神社に入り気付き驚いたことは、神社の施設の中に刻まれた協力者や支援者の名前の中に歴代の政治家や著名人の名前が多くあったことでした。単なる宗教施設ではないと思いました。靖国神社は「日本の精神」という人も少なからずいるのが現実ですが、靖国神社を造るための木材は、かつての日本の植民地であった台湾から持ち込まれ、そして入口の大きな菊の紋章を作るために途方も無い純金が使われたといわれています。神社の本堂に入る、大鳥居から本堂までの道も中国の石を使用しているとのこと。日本精神と言いながらもずいぶん外国のものを寄せ集めている印象がありました。神社での道も、車をとめる位置まで指定され、皇族でも天皇夫妻、皇太子その他の皇族などで位置が変わり、さらに性別の違いでも位置が変わるという話を聞き、平等には程遠い人間の造った権威だと感じました。写真撮影も制限があり、本堂の写真撮影は厳しく制限され、特にマスクミには神経を尖らせているようでした。そして参拝記念のスタンプ台と用紙がおかれている台がありました。紙には「参拝記念」と書かれていましたが、私は、クリスチャンですので参拝は無論することはなく、代わりに紙の上に線を引っ張り「訪問記念」と書いてスタンプを押しました。

その後博物館である遊就館を訪れました。非常に広くじっくり見るのは困難でした。早足で見まわりました。意外なのは、歴史問題で関係がゆれている中国や韓国関係の歴史については掲示が少なく、あってもありきたりの内容に留まっていました。それ以上に日本の為、犠牲になった人、殉死した人を奉りたたえる方向で物事が書かれていました。特攻隊についても書かれていました。「生命より何か貴重なことがある、それは国のために死ぬことだ」ということを暗示しているかのようでした。

このような神社を支持する人は、「国益」が大切だとよく話します。しかしこれは間違いだと思います。6千人のビザで知られている日本人の外交官杉原千畝氏は、一時は裏切り者、非国民という謗りをうけました。いわゆる「国益」には反したものの人道には反しませんでした。いわゆるキリスト教でいう地の塩のような役割を果たしたと言えると思います。いわゆる名誉や目立つことでは無くても輝いているものです。同時に「国益」や「国のため」ということばが、空虚で主観的な意味合いを持つものと感じました。人間の造った利害関係に過ぎないとも。そしていわゆる権威よりも、すべての人にあまねく光を注ぐ神の権威の強さと正しさを痛感しました。そういう点で、新しいことを知ることが出来た良い機会だったと思います。 K.T.

【教会歳時記】ファミリーキャンプの回想

「人生の日和は、いつも快晴とは限らない」だからこそ、祈りがあり、救いを求める信仰があるのだろう。2006年10月8日の朝、東京は稀にみる快晴、爽やかな秋風に包まれていた。近來にない程の快晴であった。ファミリーキャンプに向け、車2台に分乗、午前6時過ぎ経堂を出発、一路、関越道から沼田、尾瀬を目指した。周辺の山は指呼の内に輝き微笑んでいた。尾瀬の入口、戸倉並木の駐車場に着く頃、講談の出だしでいうと、正に「一天俄かにかき曇り、大粒の雨が……」日本海新潟方面より発生した異常低気圧により、沼田地方に暴風雨警報発令という。それでも、今日の目的地、尾瀬ヶ原・弥二郎小屋を目指して、鳩待峠行のバスに乗る。

午前10時、様相は一変、谷川の水は激しく濁り、気温は下り、暴風雨となった。白馬・穂高では降雪、遭難があったとか。



旧約聖書のヨブ記 36:9～11 に、

「つむじ風はそのへやから、寒さは北風から来る。神のいづきによって氷が張り、広々とした水は凍る。彼は濃い雲に水圧を負わせ、雲はそのいなずまを散らす」という一節がある。我々の尾瀬散策と交流・学びを神は許してくださらなかったのか。数時間峠で待つも回復の兆し全くなく、大樹も揺らぐ風雨。

やむなく宿泊予定所に連絡・キャンセル、八方手を尽くし(今は携帯電話などというものがそれを可能にしている)、明日天候が回復したら尾瀬に登ろうと決めて、老神温泉の東明館という宿に空きを見つけて里に降りた。

山小屋の予定が、温泉ホテルということになったが、落ち着いて、主日礼拝・聖書の学び・祈り・讃美「恵みの高き峰」「山辺に向かいてわれ」、「コヘレトの言葉」3章、説教題は「神が造られた素晴らしい自然」等の学びをし、温泉につかり、和やかな交流となった。

誠に、複雑多様化する社会そのままに、天候も激変、予想外の挫折、計画変更となったが、翌日は天候回復、再び鳩待峠から尾瀬ヶ原に入り、山ノ鼻から中田代三叉路近くまで木道を歩き、池沼を散策、燧ヶ岳・至佛を撮り、紅葉を満喫して下山することができた。

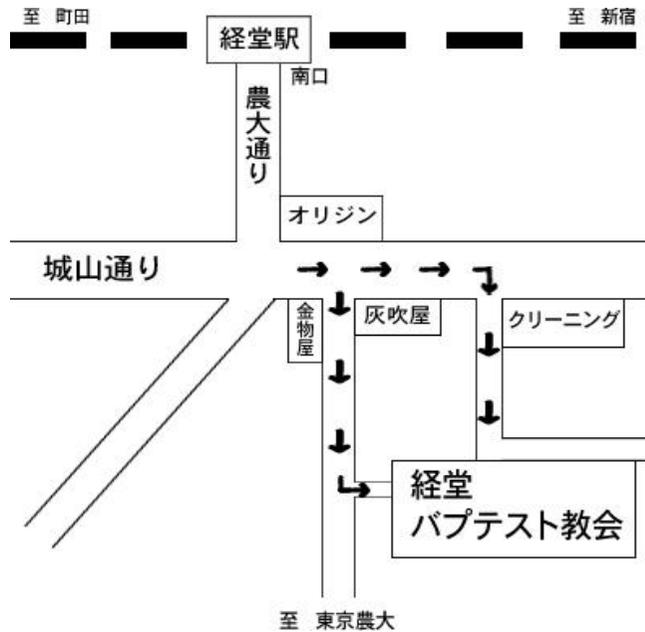
思わぬ変更であったが、所期の目的であるキャンプの「学び・祈り・交流」も果たし、その上温泉に入るといふ余禄まで頂いて、満たされて帰ることができた。

05年は箱根、06年は尾瀬と、ファミリーキャンプは天候に災いされているが、主なる神への祈りと、聖書の学び、交流は果てしなく有益であったと回想している。

さて、今年は！何月？何処へ？……あなたも参加されませんか！！

集会案内

主日礼拝	日曜日	午前 10時30分～11時30分
教会学校	日曜日	午前 11時45分～12時30分
	青年科・成人科	
聖書を学ぶ会	火曜日	午後 1時 ～ 2時
聖書研究・祈禱会	水曜日	午後 7時30分～8時30分
英語教室（英会話）	金曜日	午後 7時 ～ 8時30分



経堂バプテスト教会

牧師 間瀬 善彦

〒156-0053 世田谷区桜1-64-30

TEL 03-3426-0071

当教会は、エホバの証人、モルモン教、統一協会とは一切関係ありません。